
日本人大学生の英語発音観と
内発的動機づけ及び英語好き・嫌い感情の関連性
－質問紙調査から見る英語教育現場における発音指導の検討－

令和4年11月12日(土)

島根県立大学 田中典枝

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

2003年 「英語が使える日本人育成のための行動計画」

- | | |
|-------|---------------------------------------|
| 2002年 | 小学校に外国語指導助手の配置 |
| 2011年 | 小学校5, 6年生外国語活動として英語を導入 |
| 2020年 | 小学校5, 6年生英語教科化
小学校3年生外国語活動として英語を導入 |

「英語が使える日本人の育成」に必要な要素

リスニング能力

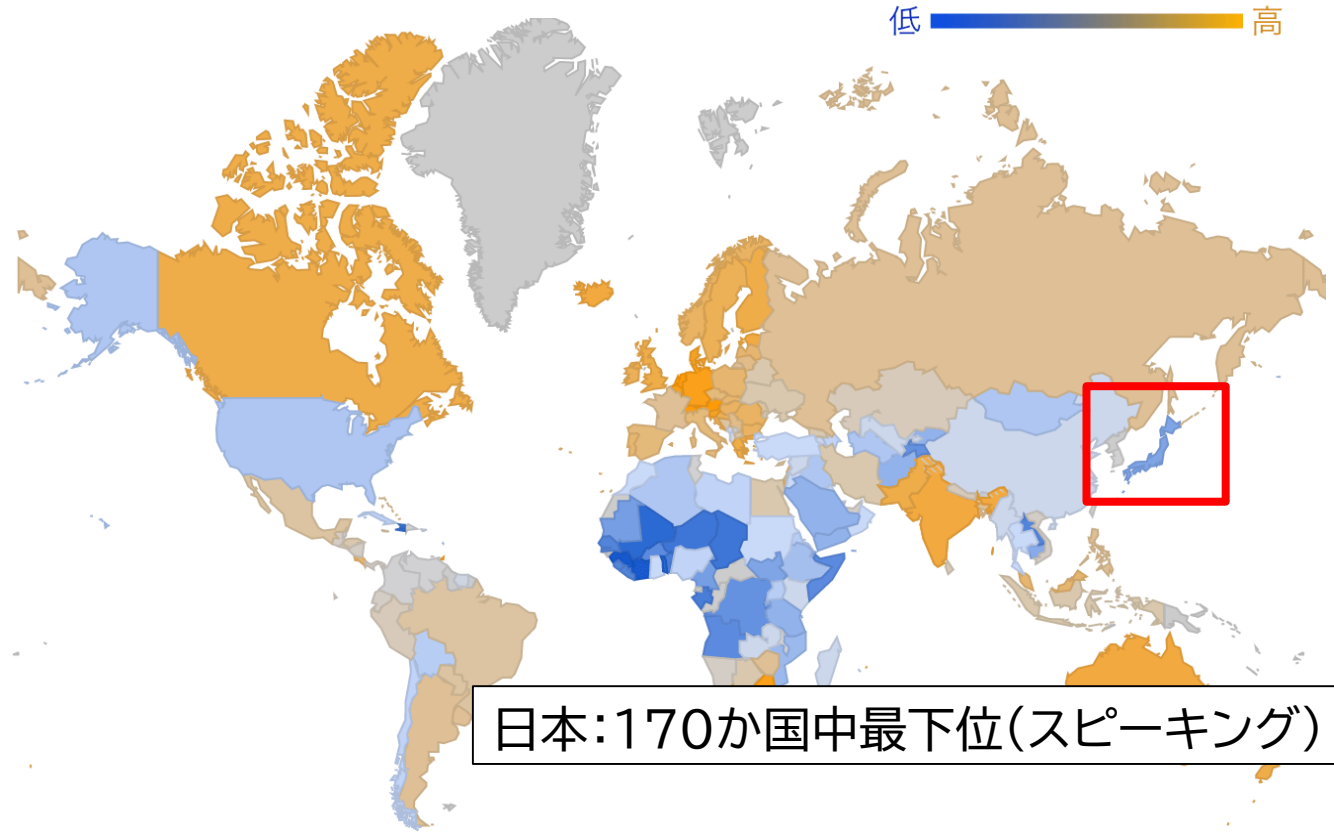
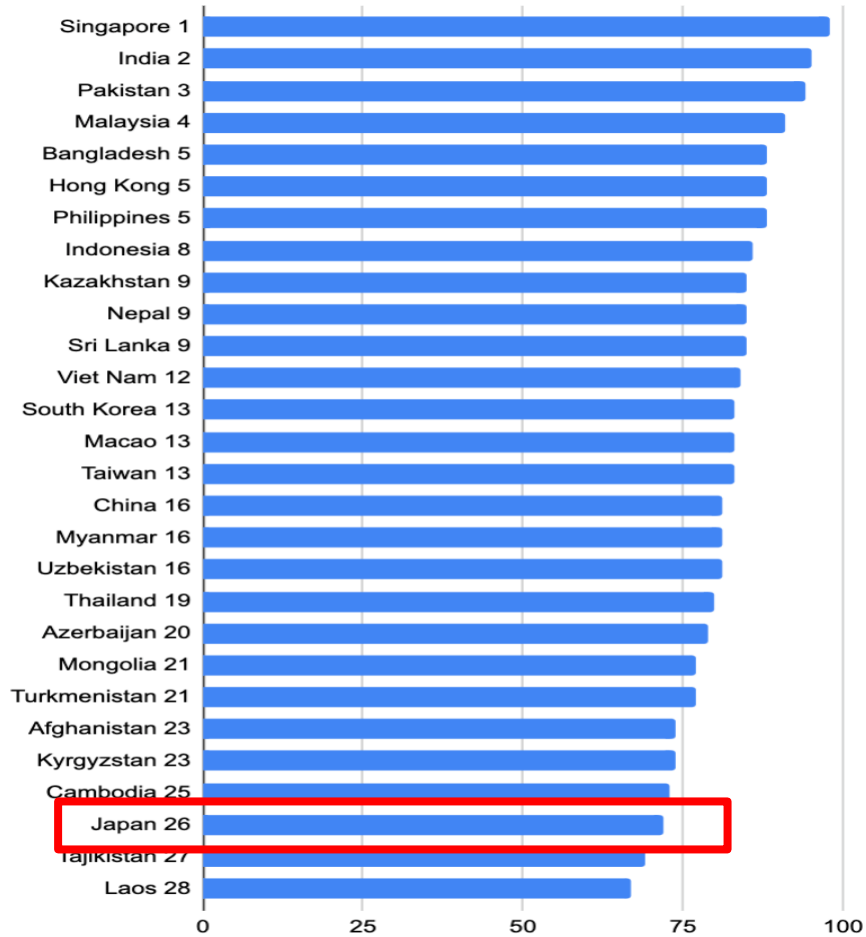
スピーキング能力

コミュニケーション能力育成のための実践活動

文部科学省(2002)『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について』

日本人の英語運用能力

TOEFL score アジア諸国比較



(出所) ETS (2019) TOEFL iBT Test and Score data summary 2019

TOEFL iBT国別比較

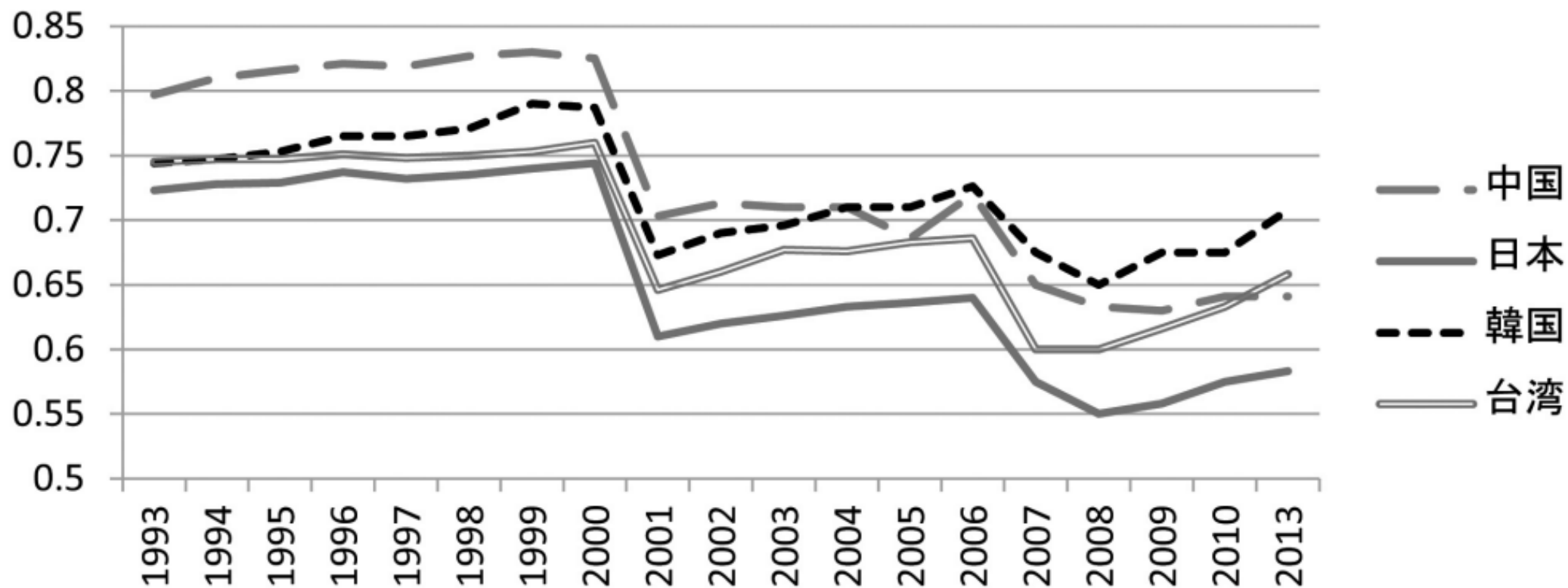


図4 TOEFL 点数の推移⁵⁾

小磯かをる(2015)『日本人の英語力の変化とその背景』

日本人の英語コミュニケーション能力の低さ

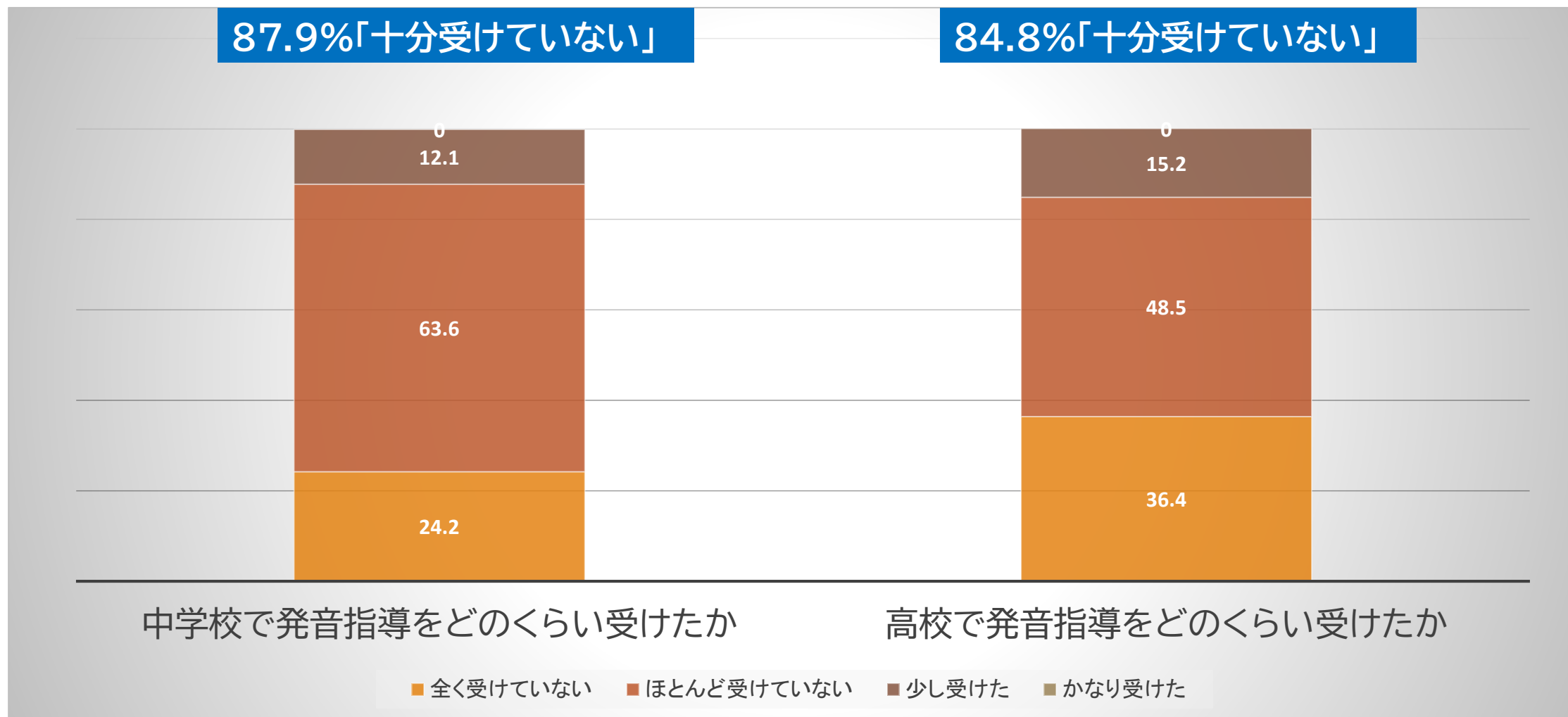
日本人は音声面の能力が他国に劣る。

(木澤, 2013)

日本の英語教育現場において、
発音指導が軽視されてきたことが原因

(田口, 2012; 手島, 2011)

音声教育実態調査(大学3年次・4年次)



(太田, 2013)

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② **学校教育で英語の発音を意識することの重要性**
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

先行研究に見る英語の発音の重要性

- 英語での対人コミュニケーションに積極的になる可能性がある (Toyama, 2015)。
- リスニング力の向上に繋がる (荻原, 2012)。
- 文法・語彙が完璧でも発音の仕方に誤りがあれば英語が通じない場合がある (田口, 2012)。
- 学習者の自信や有能感の高まりに繋がる (太田, 2013)。

学習意欲の動機づけ

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ **学習意欲の動機づけ**

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

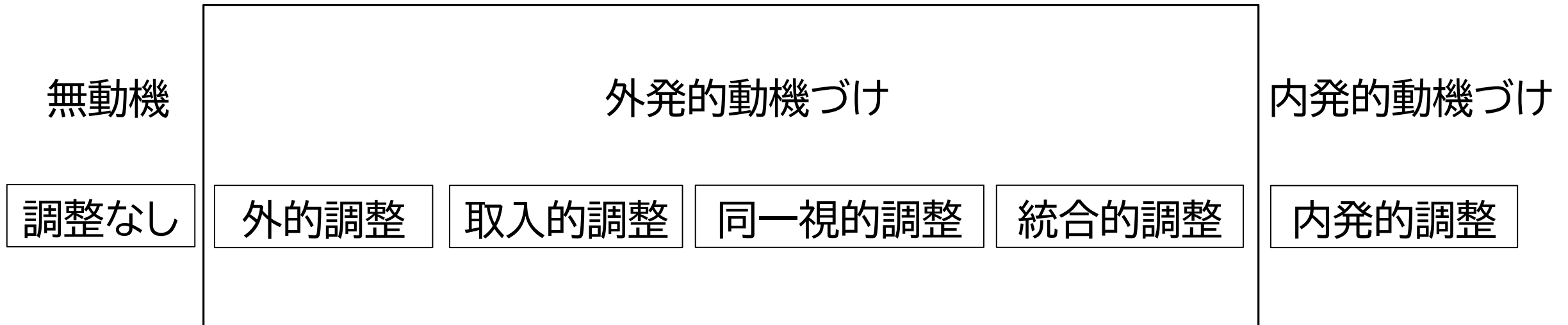
6. 今後の課題

引用文献

自己決定理論 (Deci and Ryan, 1985)

自己決定性低

自己決定性高



基本的心理欲求(自律性・有能性・関係性)

Deci, Edward L, and Ryan, Richard M. (2002) "Handbook of self-determination research."

廣森（2005）「基本的心理欲求と英語学習者の動機づけの関係」

大学1年生(180名)
質問紙調査

基本的心理欲求

- ①有能性 ②関係性 ③自律性

英語学習動機づけ

- ①内発 ②同一視 ③取入れ
④外的 ⑤無動機

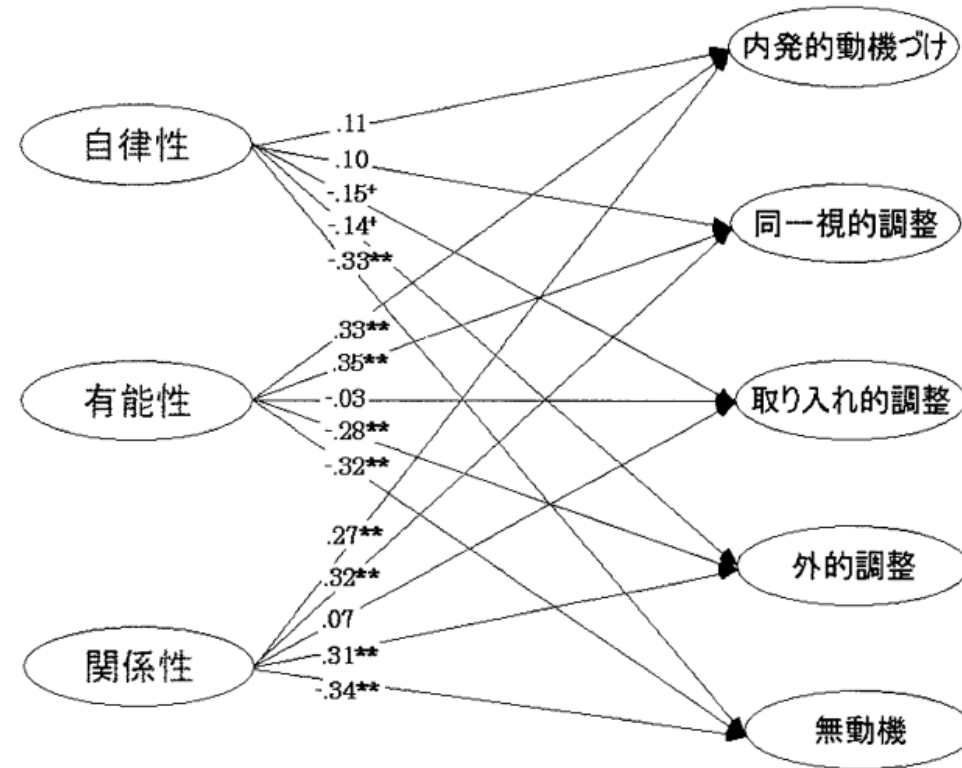


図 4: 心理的欲求と動機づけの各タイプの因果モデル (標準化解) (+ $p < .10$, ** $p < .01$)

3つの基本的心理欲求は英語学習者の5つの動機づけタイプと相関関係

廣森友人(2005)『外国語学習者の動機づけを高める3つの要因－全体傾向と個人差の観点から－』

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

研究の目的

英語の発音指導が学習者の動機づけを高めるかどうかを検証するための予備調査

**学習者の発音に対する意識と
動機づけの関係性を明らかにすること**

リサーチクエスチョン

- ① 学習者の発音に対する意識の高さと動機づけのタイプに関連があるか。
- ② 英語に対する好き・嫌い感情と内発的動機づけに関連があるか。
- ③ 発音に対する意識と基本的心理欲求に関連があるか。

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

方法

1. 調査対象者

- A大学所属の日本人大学生(非英語専攻)
- 1年生から4年生154名
(1年生49名, 2年生29名, 3年生39名, 4年生37名)

2. 手続き

- 時期:2020年5月
- 方法:質問紙(筆者作成)をメールで送信
- 対象:975名の学生(1年生から4年生)
- 回答は自由意志に基づくこと, 本調査は成績とは無関係であること, 無記名式であるのでいったん回答したものは撤回できないことといった説明の後, 回答意思がある者だけが回答した。
- 回答時間:平均8分

方法

3. 研究に用いた質問紙について

①英語の発音に関する意識調査

②英語学習動機づけ調査

③基本的心理欲求調査

①～③・・・6段階のリカートスケール

(「1(全く重要でない)」、「2(重要でない)」、「3(あまり重要でない)」、「4(やや重要)」、「5(重要である)」、「6(非常に重要である)」)

④基本属性についての設問

「英語好き・嫌い」調査

(「あなたは英語が好きですか」という問いに対し「はい」「いいえ」の2択で回答

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

データの分析

1. 英語の発音に対する意識調査 基本統計量

2. 英語の発音に対する意識と動機づけの関連調査

「英語発音意識調査の総合点を算出し、四分位範囲で4群に分ける。
4群間で5つの動機づけ調整タイプを比較

3. 内発的動機づけと英語好き・嫌い感情の関連調査

内発的調整総合点と、英語好き・嫌い調査の回答を比較

4. 基本的心理欲求と動機づけの関連性

「英語発音意識調査の総合点を算出し、四分位範囲で4群に分ける。
4群間で3つの欲求(有能性・自律性・関係性)を比較

一元配置分散分析(有意水準0.05(5 %))

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

結果①-1 大学生英語学習者の英語の発音に対する意識調査

表1 英語発音意識調査 基本統計量

番号	質問項目	平均	標準偏差
8	英語を話す・聞く・発音する練習は楽しくあるべきだ	5.082	1.113
1	発音は、英会話ではとても重要だ	4.960	1.188
9	上手く発音するコツを知りたい	4.947	1.188
4	カタカナ英語の発音で十分に通じるため、発音は関係ないと思う	4.775	1.239
3	自分の発音を、出来る限りネイティブスピーカーに近づけたい	4.723	1.308
7	英語をきれいに発音できることは重要だと思う	4.631	1.291
6	大学で発音の授業は必要だと思う	4.424	1.339
16	英語の発音がきれいな日本人教師だとやる気が出る	4.313	1.401
19	間違った発音をしたらすぐに教員や友達に直して欲しい	4.219	1.346

**大学生英語学習者は英語の発音に対して重要であると認識している。
同時に、カタカナ英語でも通じれば良いという学習者もいる。**

結果①-2 大学生英語学習者の英語の発音に対する意識調査

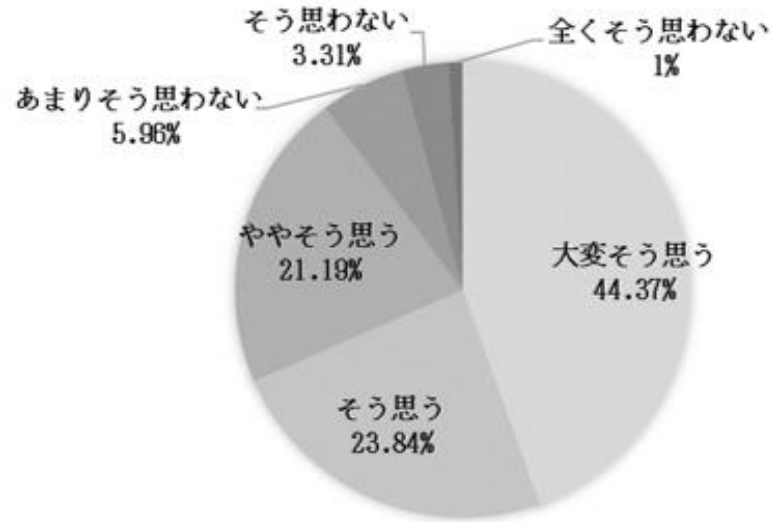


図1「発音は英会話ではとても重要だ」
の回答結果(N=154)

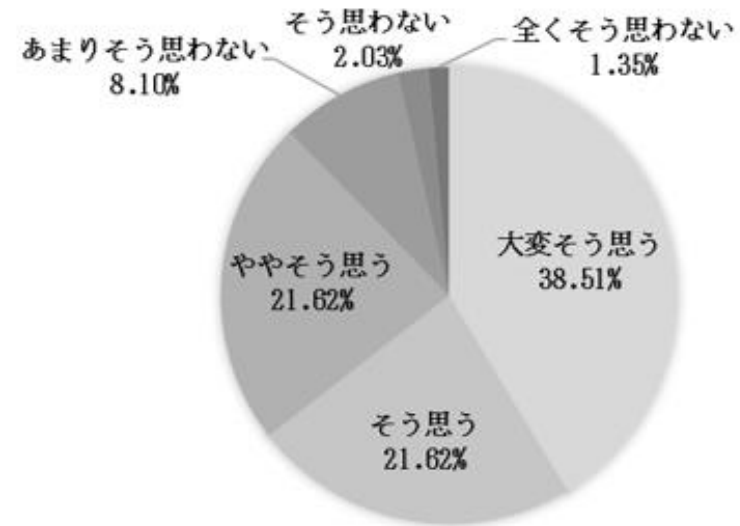


図2「自分の発音をネイティブスピーカーに近づけたい」
の回答結果(N=154)

**全体の約9割の大学生英語学習者が英語の発音の重要性を認識している。
全体の8割以上が母語話者の水準まで発音を伸ばしたいと意識している。**

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

結果②-1 大学生英語学習者の英語の発音に対する意識と動機づけの関連調査(内発的調整)

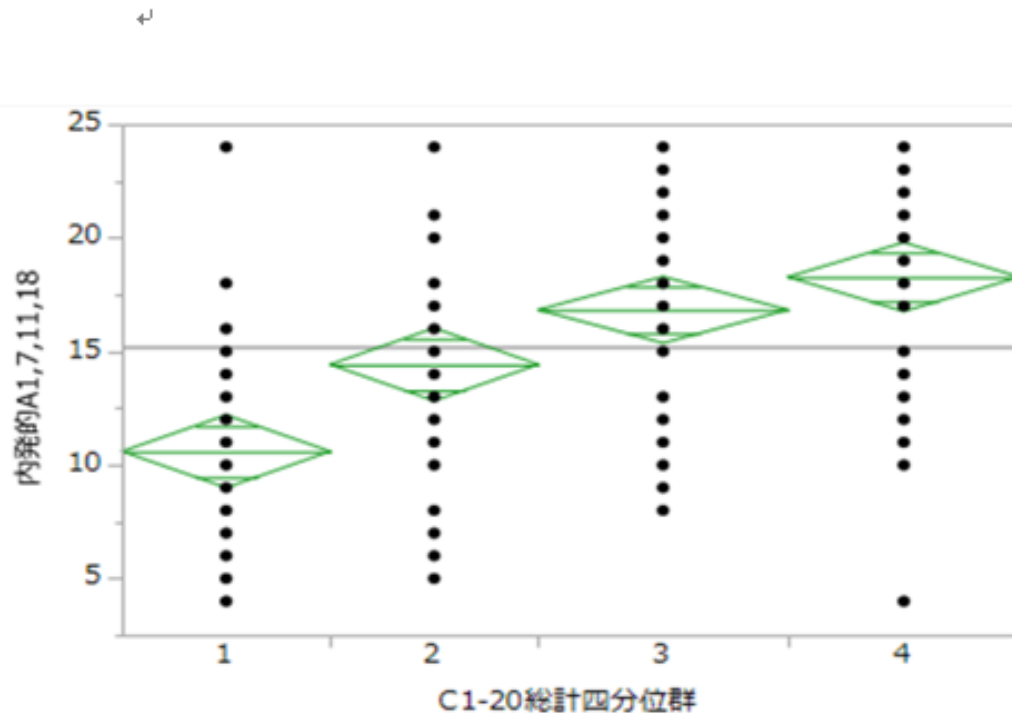


図3 発音意識総合得点による4群の内発的調整スコア分布

表2 4群の内発的調整スコア平均

水準	数	平均	標準誤差	下限95%	上限95%
1	35	10.6000	0.8106	8.9980	12.2020
2	35	14.4286	14.4286	12.8270	16.0310
3	42	16.8333	16.8333	15.3710	18.2960
4	39	18.2821	18.2821	16.7640	19.8000

発音に対する意識が高い群ほど内発的動機づけが有意に高い。

結果②-2 大学生英語学習者の英語の発音に対する意識と動機づけの関連調査(同一視的調整)

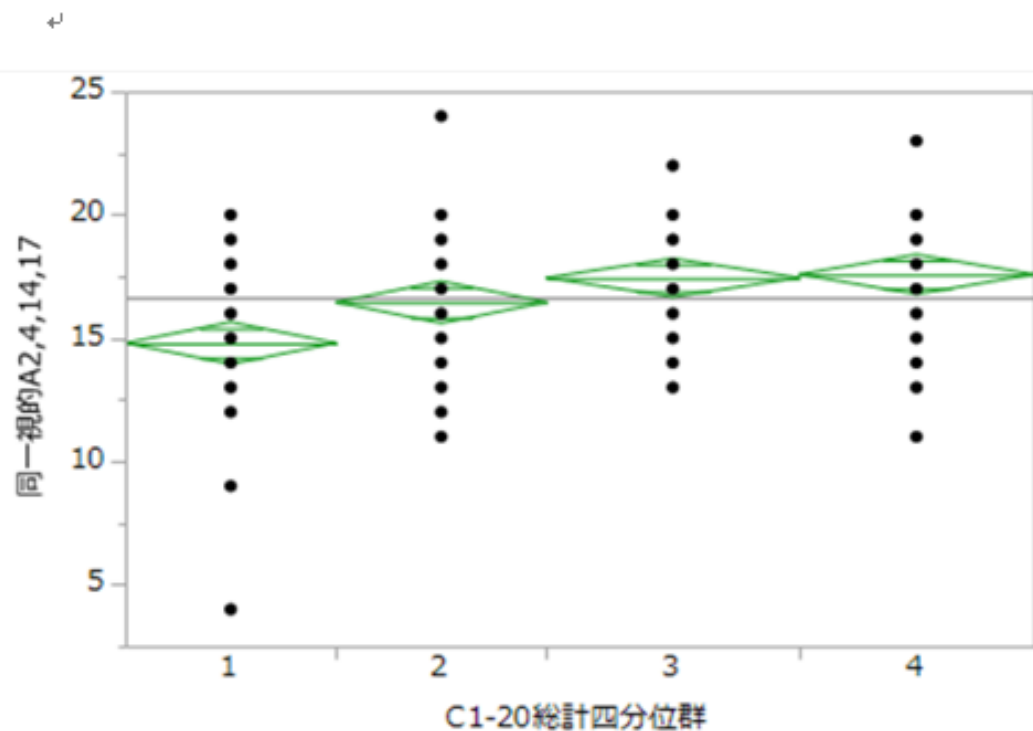


図4 発音意識総合得点による4群の同一視的調整スコア分布

表3 4群の同一視的調整スコア平均

水準	数	平均	標準誤差	下限95%	上限95%
1	35	14.8000	0.4306	13.9490	15.6510
2	35	16.4571	0.4306	15.6060	17.3080
3	42	17.4524	0.3931	16.6750	18.2290
4	39	17.5897	0.4080	16.7840	18.3960

発音に対する意識が高い群ほど同一視的動機づけが有意に高い。

結果②-3 大学生英語学習者の英語の発音に対する意識と動機づけの関連調査(取入的調整)

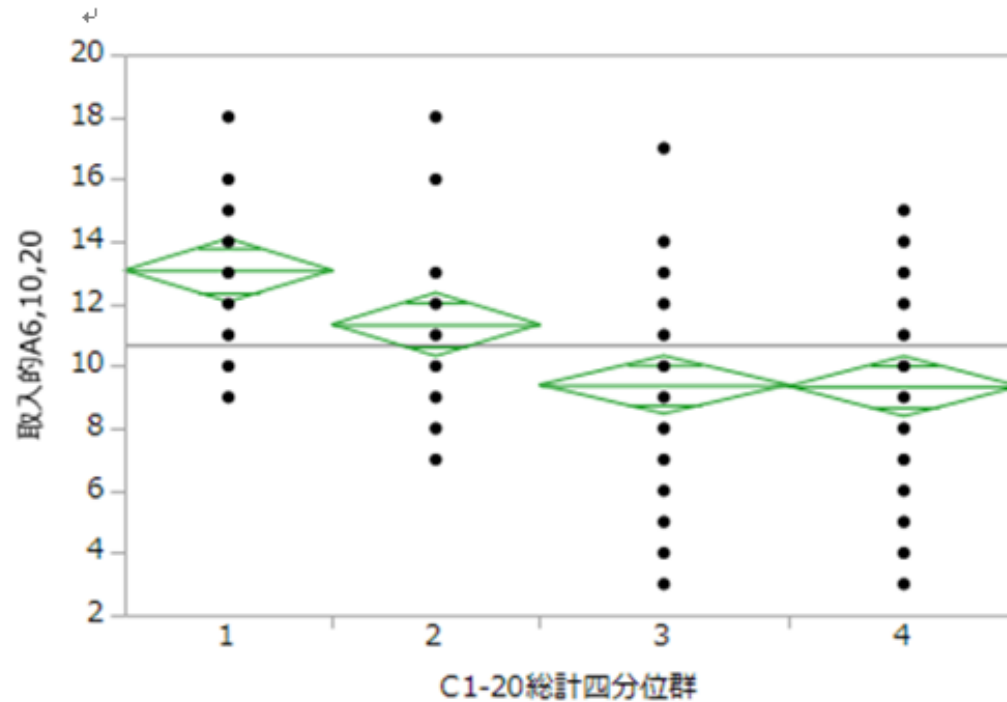


表3 4群の取入的調整スコア平均

水準	数	平均	標準誤差	下限95%	上限95%
1	35	13.0857	0.5133	12.0710	14.1000
2	35	11.3429	0.5133	10.3280	12.3570
3	42	9.4048	0.4686	8.4790	10.3310
4	39	9.3590	0.4863	8.3980	10.3200

図5 発音意識総合得点による4群の取入的調整スコア分布

発音に対する意識が高い群ほど取入的動機づけが有意に低い。

結果②-4 大学生英語学習者の英語の発音に対する意識と動機づけの関連調査(外的調整)

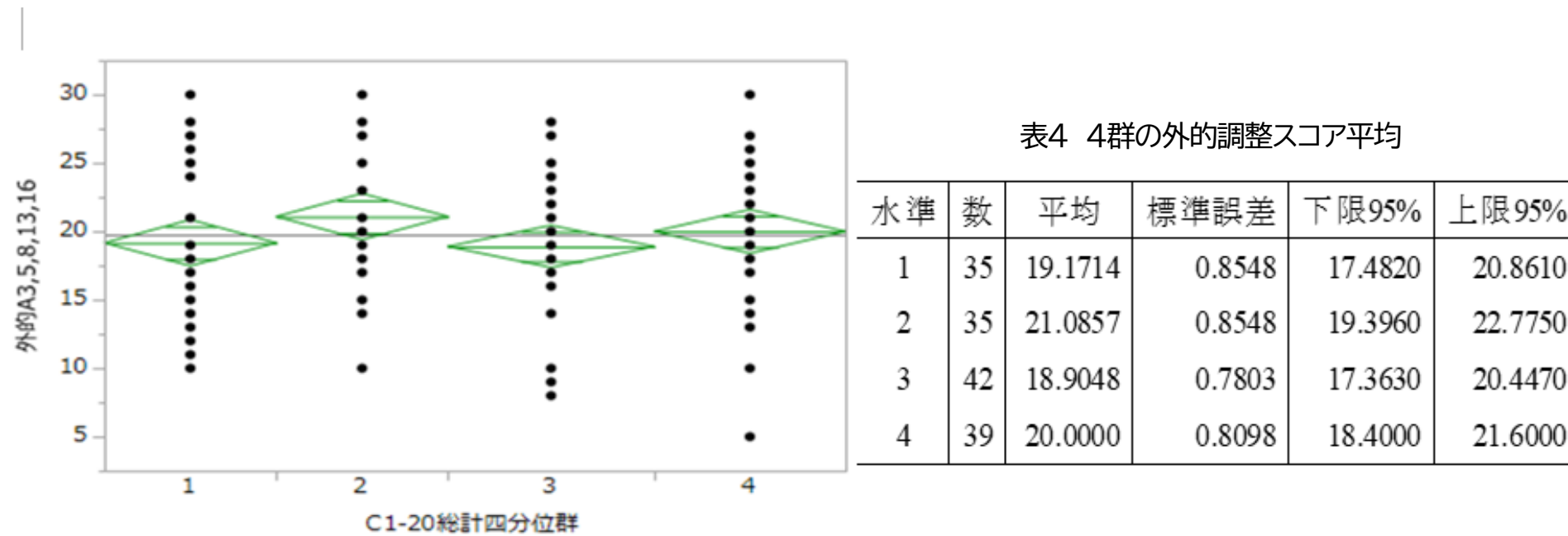


図6 発音意識総合得点による4群の外的調整スコア分布

発音に対する意識が高い群ほど外的動機づけが有意に高い。

結果②-5 大学生英語学習者の英語の発音に対する意識と動機づけの関連調査(無動機)

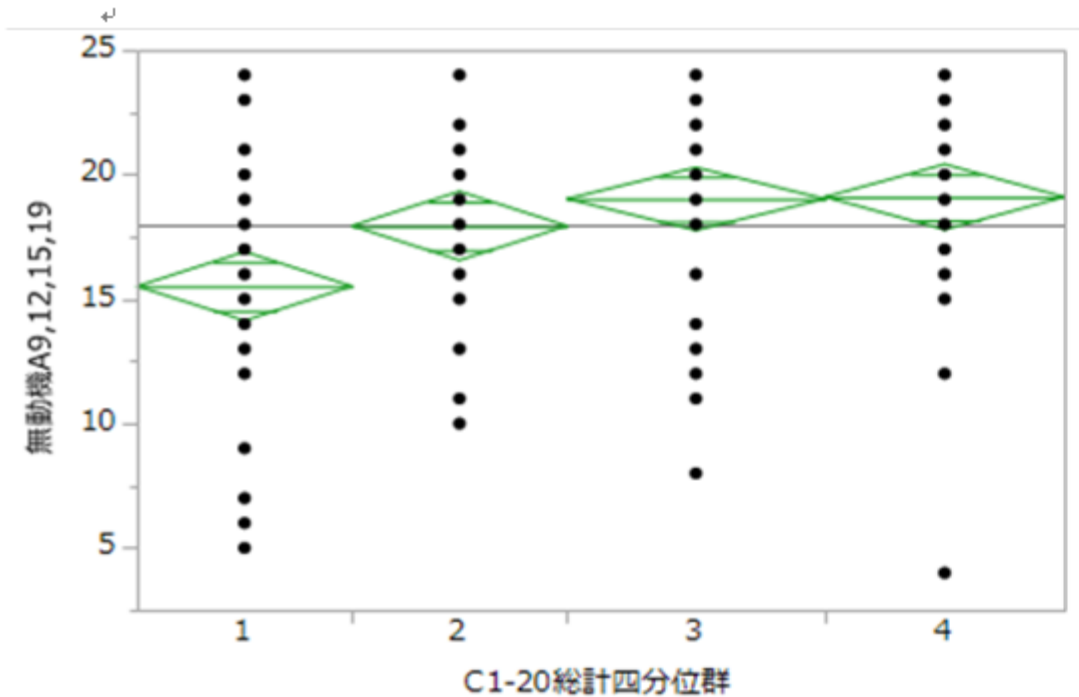


図7 発音意識総合得点による4群の無動機スコア分布

表5 4群の無動機スコア平均

水準	数	平均	標準誤差	下限95%	上限95%
1	35	15.5143	0.7002	14.1310	16.8980
2	35	17.9429	0.7002	16.5590	19.3260
3	42	19.0238	0.6390	17.7610	20.8270
4	39	19.1026	0.6632	17.7920	20.4130

発音に対する意識が高い群ほど無動機のスコアが有意に高い。

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

結果③ 内発的動機づけと英語好き・嫌い感情の関連調査

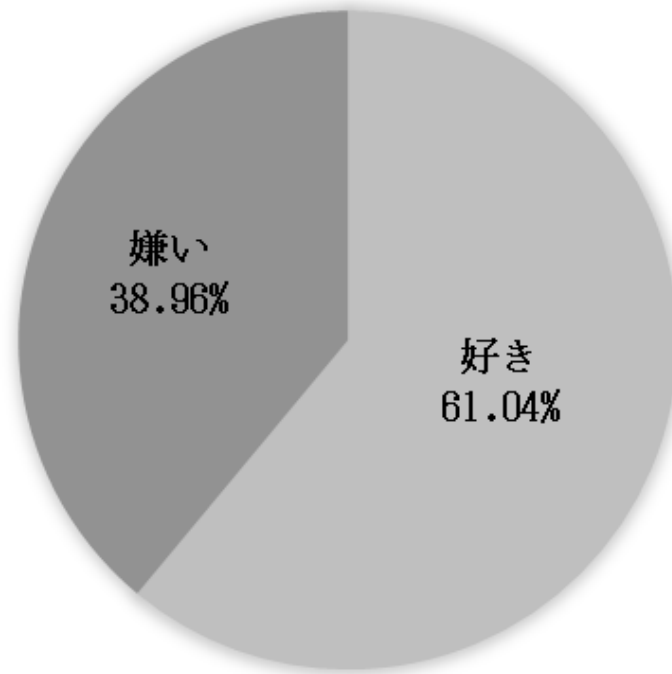


図8 「あなたは英語が好きですか」の問に対する回答

結果③ 内発的動機づけと英語好き・嫌い感情の関連調査

表6 内発的動機づけと「英語好き・嫌い」感情の関連

水準	数	平均	標準誤差	平均の 標準誤差	下限95%	上限95%
英語好き群	93	18.4516	3.7315	0.3869	17.6830	19.2200
英語嫌い群	60	10.0667	3.9654	0.5119	0.0420	11.0910

内発的動機が高い・・・「英語好き」感情が高い

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

結果④ 基本的心理欲求と動機づけの関連性調査

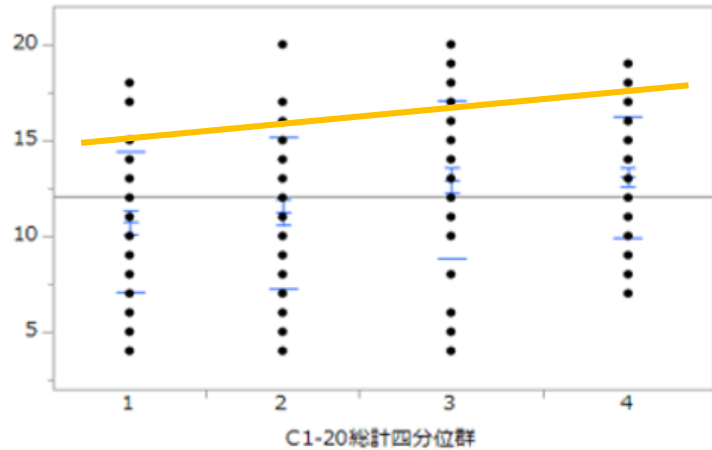


図9 発音意識総合得点による4群の有能性スコア

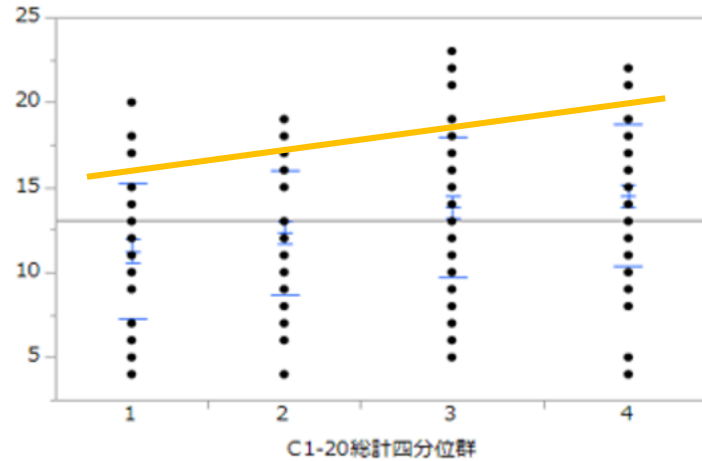


図10 発音意識総合得点による4群の自律性スコア

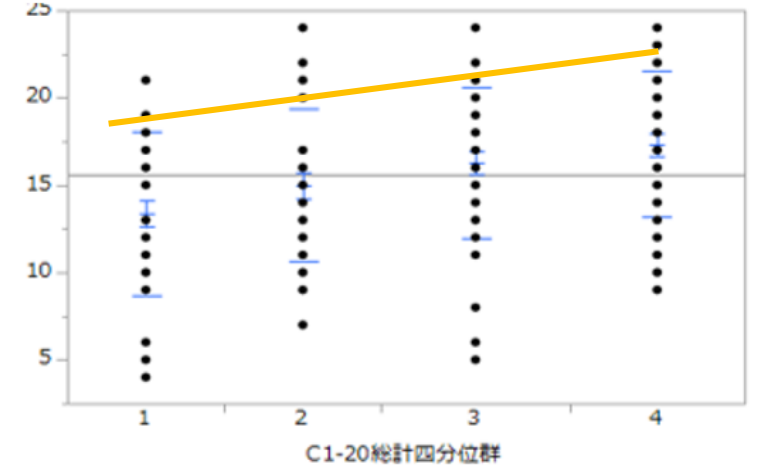


図11 発音意識総合得点による4群の関係性スコア

有能性・自律性・関係性のいずれも、発音意識調査の総合点が高いほどそれぞれのスコアは有意に高かった ($p < .0001$) (図9, 図10, 図11)。

結果のまとめ

1. 日本人大学生英語学習者は、
英語の発音に対する意識を高く持っている。
2. 英語の発音に対する意識の高さと動機づけには
関連がある。
3. 英語学習における内発的動機づけの高さと
学習者の英語好き・嫌い感情には関連がある。
4. 基本的心理欲求と英語の発音に対する意識の高さには
関連がある。

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

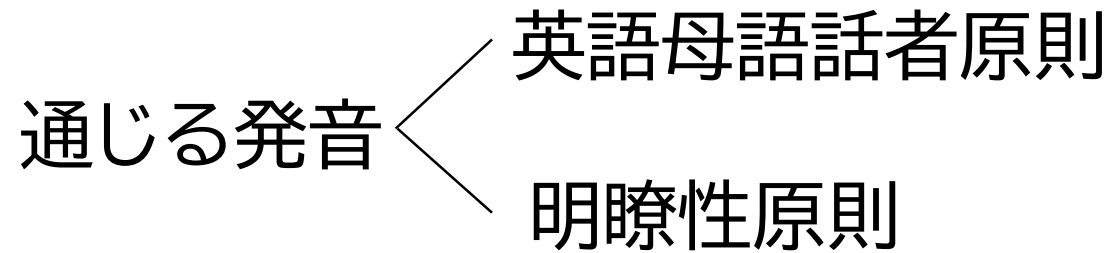
考察① 「英語の発音に対する意識を持つことの重要性」

学習者の9割
8割
英語の発音は重要
自分の発音をネイティブ
スピーカーに近づけたい

英語の発音は重要

英語の発音は重要	4.96/6.00
カタカナ英語の発音で十分	4.78/6.00

通じれば良い



安藤香織(2019)『英語発音指導における目標の変遷』

英語母語話者原則

“It is both desirable and possible to achieve native-like pronunciation in a foreign language.”

ネイティブ発音を達成目標とするのは理想的かつ可能

明瞭性原則

“Learners simply need to be understandable.”

相手にとって理解可能であることが望ましい

Levis, John M (2005). “Changing contexts and shifting paradigms in pronunciation teaching.”

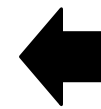
国際共通語としての英語

一定の知識

国際的に**通用する英語**を話す

国際的に通用する発音

「発音は気にしなくても良いから自由に話さない」



教師として**責任放棄**

十分な発音指導を行わずして「読みなさい」「話さない」と言うのは良策とは言えない。

太田かおり(2013)『日本の英語教育における盲点』

通じる発音
明瞭性の高い発音

聞き手が混乱しない発音
聞き手がどれほど聞き取れるか

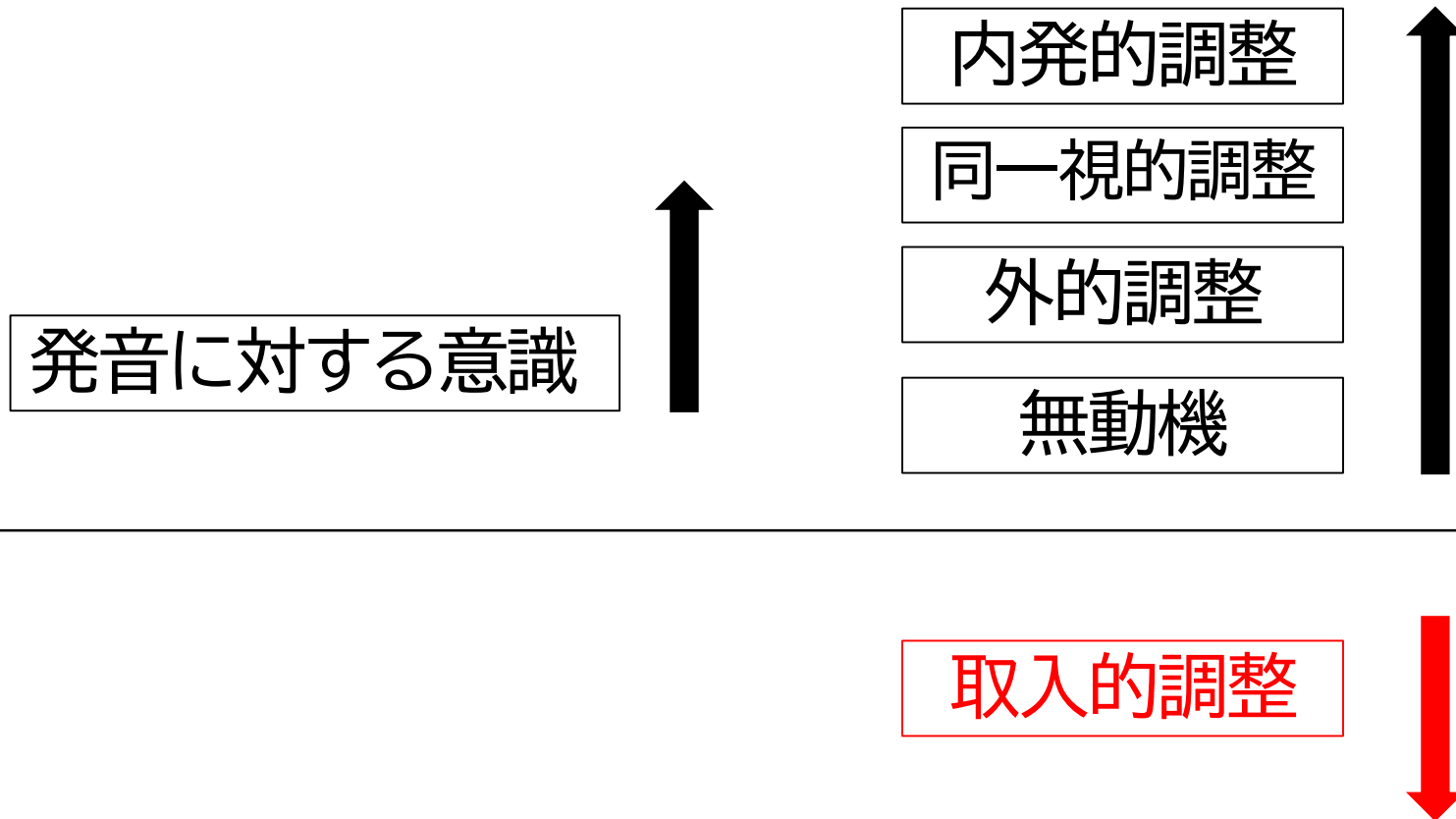
伝わる発音

- ✖ 英語母語話者の発音
- ✖ 「伝われば良いのだから発音は適当で良い」
- ✖ 「日本語訛り英語を話すことが目標で十分」

峯松明信・岡部浩司・シューヘンリック・広瀬啓吉(2005)『米語母語話者を対象とした日本人英語の聞き取り調査』

山根繁(2015)『日本人学習者の目指す明瞭性(intelligibility)の高い英語発音とは』

考察② 「英語の発音に対する意識の高さと5つの動機づけタイプ」



考察② 「英語の発音に対する意識の高さと5つの動機づけタイプ」

取入的調整

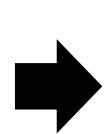
自己決定権が統制されているという感覚

「英語が話せると格好良い」

「先生に怒られて恥ずかしい思いをしたくない」

プライドや周囲からの目を気にすることで行動が生起。

他者からどのように思われているかによって行動を突き動かされる調整。



評価方法の工夫

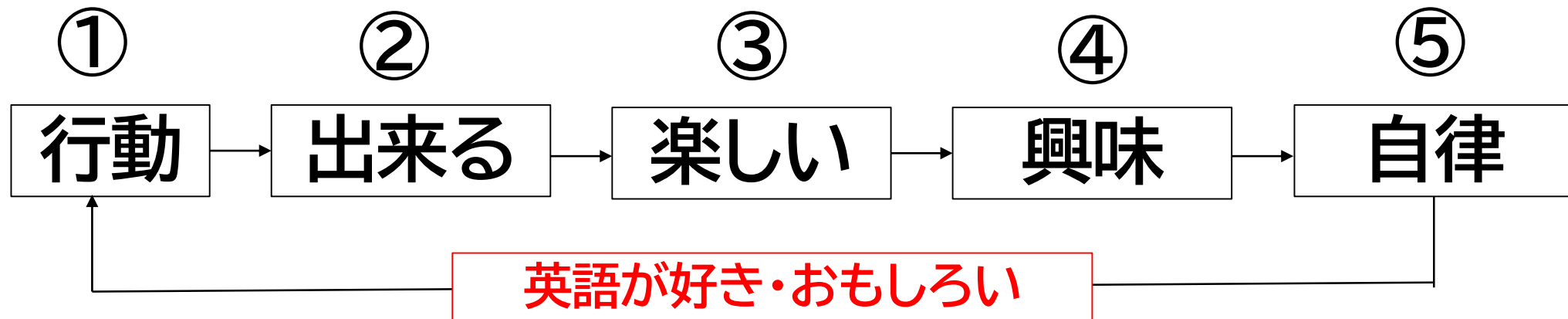
教育現場での周囲との関わりを取り入れた活動

考察③「内発的動機づけと英語好き・嫌い感情」

「英語学習動機づけ調査」内発的動機づけ質問項目

1. 英語を勉強するのが楽しい。
2. 英語の知識が増えるのは楽しいから。
3. 英語を勉強して、新しい発見があると楽しいから。
4. 英語の授業が楽しいから。

楽しさ



考察③「内発的動機づけと英語好き・嫌い感情」

教育現場での「楽しさ」(三浦, 2012)

- ・自分の役に立つ
- ・自分が人間的に向上し成長する姿が見える
- ・級友と良い関係を築ける
- ・自分は有能であると感じる

学習の楽しさ
興味・関心

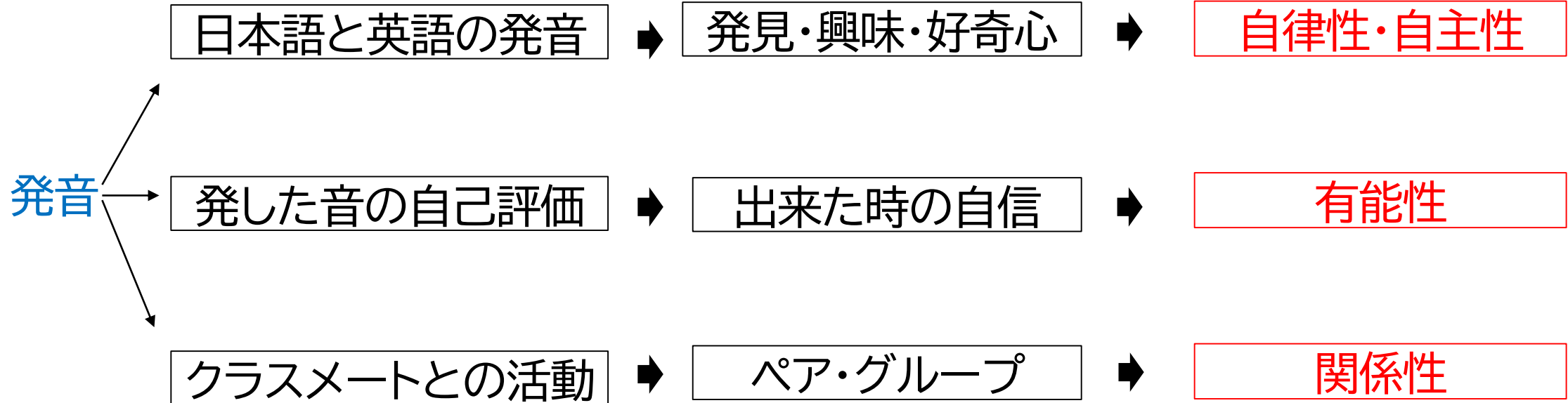
「自律性」「有能性」「関係性」の充足

学習意欲を内発的に動機づける

「英語が好き・楽しい」

三浦孝(2012)『指導困難校での英語教育－英語を得意にし、英語を好きにさせる指導とは－』

考察④「基本的心理欲求と発音指導」



英語学習意欲の内発的動機づけ

結論

1. 英語の発音に対する意識の高さと動機づけには関連がある。
2. 内発的動機づけと、英語好き・嫌い感情には関連がある。
3. 基本的心理欲求と英語の発音に対する意識の高さには関連がある。

教育現場で英語の発音指導を取り入れることは学習意欲を動機づけるという観点からも重要である。

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

考察のまとめと今後の課題

1. 英語の発音に対する意識を持つことの重要性について確認し、「相手に意味を伝えることを目的とした発音」のための最低限の発音力を身に着けるような指導を行う。
2. 5つの動機づけタイプについて認知し、評価方法や活動内容について工夫する。
3. 学習者の「興味・関心」に訴え、「楽しい」と感じられるような活動を取り入れることで、英語好き感情へと繋げる。
4. 基本的心理欲求(自律性・有能性・関係性)の充足を意識した取り組み。

研究発表内容

1. 問題と目的

- ① 日本の学校英語教育の問題点
- ② 学校教育で英語の発音を意識することの重要性
- ③ 学習意欲の動機づけ

2. 研究の目的

3. 研究の方法

- ① 手続き
- ② データの分析

4. 結果

- ① 「英語の発音に対する意識」
- ② 「英語の発音に対する意識」と「動機づけ」の関連
- ③ 「内発的動機づけ」と「英語好き・嫌い」感情の関連
- ④ 「基本的心理欲求」と「動機づけ」の関連

5. 考察

6. 今後の課題

引用文献

引用文献

- Deci, Edward L, and Ryan, Richard M. *Handbook of self-determination research*. New York: The University of Rochester Press. 2002.
- Levis, John M. “Changing contexts and shifting paradigms in pronunciation teaching. ” *TESOL quarterly*, 39, 3 (2005): 369-377.
- Toyama, Michiko. “Japanese EFL learners ’ beliefs about pronunciation learning and their pronunciation skills. ” *Language and Culture*, 27 (2015): 92-114.
- 安藤香織「英語発音指導における目標の変遷」『英語英米文学』, 59 (2019): 137-149.
- ETS (2019). TOEFL iBT Test and Score data summary 2019.
参照先: http://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf
(閲覧日: 2022 年 4 月 10 日)
- 太田かおり「日本の英語教育における盲点－音声教育の現状と課題－」『九州国際大学国際関係学論集』, 8 (1/2) (2013): 37-69.
- 荻原洋「英語発音指導と国際共通語としての英語」『富山大学人間発達科学部紀要』, 6 (2) (2012): 165-171.
- 木澤利英子「明示的発音指導が中学生の英語学習に与える影響－音声スキルおよび英単語長学習攻略に着目して」『関東甲信越英語教育学会誌』, 27 (0) (2013): 99-112.

- 小磯かをる「日本人の英語力の変化とその背景－JGSS 累積データを基に－」
『大阪商業大学論集』, 10 (4) (2015): 17-24.
- 田口賀也 「英語発音指導実態調査とその考察」『東洋大学経済論集』, 8 (1)
(2012): 69-77.
- 手島良「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について－発音指導
の現状と課題－」『Journal of the Phonetic Society of Japan』, 5 (1) (2011): 31-
43.
- 廣森友人「外国語学習者の動機づけを高める 3 つの要因－全体傾向と個人差の
観点から－」『大学英語教育学会紀要』, 41 (2005): 37-50.
- ベネッセ教育総合研究所『高 3 に英語学習に関する調査 - 2015～2021 継続調
査』参照先: <https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=5748>
(閲覧日: 2022 年 4 月 10 日)
- 三浦孝「指導困難校での英語教育－英語を得意にし, 英語を好きにさせる指導
とは－」『静岡大学教育学部研究報告』, 44 (2012): 55-84.
- 峯松明信・岡部浩司・シューヘンリック・広瀬啓吉「米語母語話者を対象とし
た日本人英語の聞き取り調査」『信学技報』, 104 (630) (2005): 31-36.

文部科学省 (2002年7月12日). 『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』 参照先：

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm#plan

(閲覧日：2022年11月9日)

山根繁「日本人学習者の目指す明瞭性 (intelligibility) の高い英語発音とは」『関西大学外国語学部紀要』, 13 (2015): 129-141.

ご清聴ありがとうございました。